

京都大学大学院文学研究科 21世紀 COE プログラム
「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」

Canone Symposium

「Academica

— 学の制度と規範 —

2003.10.04

於：芝蘭会館

趣意

Academica プラトンが古代ギリシアのアテナイに設立した学園アカデメイアに由来するこの言葉は、この学園が西欧の学問研究の源に位置することによって、学園の構成員や学派だけでなく、知的な営みや学術組織一般をも指すようになった。さらに現在では、たとえば英語の academic は、「空疎な」「机上の空論にすぎない」という意味で日常的に使われている。現代的用法には、学問研究と現実の社会生活との遊離した今日の状況が示唆されているであろう。

しかし、このような状況は、プラトンのアカデメイア創設の意図とは対極にある。彼は、その当時すでに無用の知的遊戯（現代の侮蔑的な意味での academic!）と見られていた「哲学」が現実社会のなかで力もちうるために、教育研究の組織と制度を実現したのである。実際、いかなる知的営みも、人間社会において何らかの位置を占めようとするかぎり、一定の組織や制度は不可欠であろう。

もちろん組織体制の整備は、施設環境だけでなく知のスタイルと内実にもかかわる。多くの場合、一定の信条や典籍、技法が規範化され、それに基づく教育、研究、制作のプログラムも制度化される。その結果、そこには安定とともに、停滞の可能性も生じるであろう。しかし同時に、制度化と規範化に回収されない新たな知の運動も、むしろそうしたなかから誕生するであろう。

このシンポジウムは、まず、この言葉の大本にあったプラトンの含意にいったん立ち戻り、思想や作品の背景で機能していた規範と制度を具体的に解明することを目指して企図された。思想家や芸術家、制作者たちはどのような体制のもとで、何を学び、どのような規範やモデルに依拠しあるいは抵抗したのか。制度や規範は人々の営みをどのように支え、また拘束したのか。制度と規範をめぐる知と技のダイナミズムの一端が、多様な時代と地域の実例の検討を通じて明らかにされるであろう。

さらにこうした考察が、さまざまな知的・芸術的活動の環境的基盤を明らかにすることを通じて、Academica の現代の派生的用法が示唆するような、学術活動と現実社会との関わりという問題を再考する手がかりとなることを願っている。

プログラム

13:00 挨拶

内山 勝利(京都大学文学研究科教授 / ギリシア哲学)

13:05 発表

野町 啓(流通経済大学流通情報学部教授 / 西洋古代・中世思想)

ユダヤ人 - ヘレニズム - ローマ帝国

- 紀元一世紀アレキサンドリアのフィロンの場合 -

森 雅彦(宮城学院女子大学学芸学部教授 / 西洋美術史)

前近代イタリアの美術アカデミーをめぐって

- フィレンツェとローマを中心に -

休憩

佐々木 丞平(京都大学文学研究科教授 / 日本美術史)

狩野派の「学画」と「質画」をめぐって

福谷 茂(京都大学文学研究科助教授 / 近世哲学史)

「伝統の発明」と哲学的アカデミズムの成立

カントとクーザンの場合

15:30~16:00 休憩

16:00~17:30 コメント・質疑応答

川添 信介(京都大学文学研究科助教授 / 西洋中世哲学史)

平川 佳世(近畿大学文芸学部専任講師 / 西洋美術史)

根立 研介(京都大学文学研究科助教授 / 日本美術史)

小林 道夫(大阪市立大学文学研究科教授 / 西洋近世哲学)

司会・総括 中畑 正志(京都大学文学研究科助教授 / 西洋古代哲学)

発表要旨

ユダヤ人－ヘレニズム－ローマ帝国

紀元一世紀アレキサンドリアのフィロンの場合 -

野町 啓 (流通経済大学流通情報学部教授)

フィロンは、紀元一世紀前半、当時の一大国際都市アレキサンドリアのユダヤ人名望家の出自であり、『聖書』(旧約)のギリシア哲学、ことにプラトンの援用による解釈を中心とする膨大な著作が伝存し、その思想が後代のキリスト教教父やいわゆるネオ・プラトニズムの展開に多大な影響を及ぼしたことで知られている。だが彼の生没年代は不明であり、ただ『フラックスへの反論』及び『ガイウスへの使節』の二著から、38年夏アレキサンドリアで勃発したギリシア系住民によるユダヤ人迫害(ポグロム)に際し、自民族の立場を弁護するため、同地のユダヤ人代表の一人として、ローマ皇帝ガイウスに謁見したことが、彼の生涯における歴史的事実として知られているだけである。彼は、著作の中で、「モーセの使徒」と自認し、割礼を受け、「祈りの家」(プロセーケ=シュナゴグ)において篤信のユダヤ教徒としての教育を受ける一方、他面「ギュムナシオン」に出入りし、ギリシア的教育(encyclios paideia)を身につけており、これが『聖書』の解釈にあたって活用されたといつてよい。

このような彼の二面性をめぐって、近代の研究者は、彼に対し、<Philo Judaeus>、<Philo Alexandrinus>の二様の呼び方をし、彼をそのいずれの側に位置づけるべきかをめぐって論争をくり返してきた。たしかに、彼と同様の環境と教育を受けたであろう一族の中には、甥のティベリウス・ユリウス・アレクサンデルのように、規範としてのユダヤ教を棄教し、上級ローマ騎士としてユダヤ総督となり、同胞ユダヤ人を弾圧した人物もいる。しかし、フィロンの場合、いわゆるヘレニズム(ギリシア的教養)とユダヤ教の伝統との関係は、対立・異他性において、ディコトミーにおいて把握することは必ずしも妥当ではない。例えば彼は、ある著作の中ではプラトンに対し「最も神聖な人」とモーセに匹敵する形容をしながら、『創世記』解釈(『世界の創造』)では、『ティマイオス』の大幅な援用にもかかわらず、プラトンの名前はあげず、「古人の一人」として暗示するに止まり、屈折した態度をみせている。本発表では、フィロンのヘレニズムに対する観点で、例えば大カトにみられるローマ人のそれとの類似を指摘し、彼の思想を中心としつつ、権力の側としてのローマ帝国(政治)、ヘレニズム(思想・文化)、ユダヤ教(宗教)の関係の一面を分析してみたい。

[付記: なお、フィロンについては、『西洋古典叢書』所収『フィロン フラックスへの反論、ガイウスへの使節』に付された秦剛平氏の解説、もしくは、拙著『謎の古代都市アレキサンドリア』(講談社現代新書)第五章「哲学都市アレキサンドリア」、拙稿「ヘレニズム・ローマ時代のユダヤ思想」(岩波講座『東洋思想』第1巻所収)のいずれかを参看いただければ幸いである。]

前近代イタリアの美術アカデミーをめぐって

- フィレンツェとローマを中心に -

森 雅彦（宮城学院女子大学学芸学部教授）

美術史において、アカデミー、アカデミズムといった問題は、今日でも死語でない。それは、今日なお再生産され続けてやまない、いわゆるモダニスト・アカデミズムといった現象を反芻するだけでも明らかであろう。

西洋美術史において、こうした現象の原基と見なされてきた、公的制度としての美術アカデミーは、16世紀後半に誕生し、その後、西洋各地に設立されるに至ったものであった。なかんずく後代の重要なモデルと目されたのは、フィレンツェ、ローマ、パリなどのそれである。ここでの報告は、とくに前近代イタリアの事例を通して、美術アカデミーの孕む問題を、あえて現代に通じるマクロな観点を意識しつつ「前景化」してみることにあ

る。前近代のアカデミー教育の立場は、無意識のうちに、二、三の前提を内包している。第一に、芸術の基礎は言語習得同様、教示かつ学習しうるという観念、また芸術をこの時代の芸術は歴史画を主としたことを想起すれば明らかなように 観者を説得する視覚のコミュニケーション行為と見なしているということ、さらに言えば、芸術にはすぐれた手本となるものがありうるという意識である。こうした発想を、近代以降の主観主義的芸術論に対して、あえて芸術の主知主義的な理念モデルと呼ぶなら、それはすでに15世紀イタリア人文主義において芽生えていたものであった。

報告では、フィレンツェ素描アカデミーと、サン・ルカ・アカデミーについて、人文主義芸術論の制度的帰結ともいえる、「実践」と「経験」の知性化としてのティーチング・システムの実態を、前近代アカデミーにおける幾何学、遠近法、解剖学といった芸術のスキエンツィア、あるいは裸体素描研究に焦点を合わせて、史資料上、ほぼ確実視される事実を中心に、ごく簡単に紹介・報告する。

さらに芸術をめぐる規範の境界、そして才能を制度内部に吸収しうる制度の開放性の問題をめぐって、フィレンツェ、ローマのコントラストを意識しつつ、その現実を検討してみたい。中でも、もっとも興味深い現象は、所与の芸術家集団において、芸術を枠付けし、境界付ける観念としてのカノン意識であって、前近代ローマのアカデミーにおいて17世紀後半以降、言い換えれば、一般にジョヴァン・ピエトロ・ベッローリたちに代表される、イデアルなローマ古典主義の言説空間の確立期と想定されてきたサン・ルカ・アカデミーで実践されたコンクールの実態や、18世紀初頭のルドヴィコ・ダヴィッドの芸術論草稿『芸術への愛』の美術アカデミー批判などを通して、前近代における美術アカデミーの意義と限界を再考してみる。

狩野派の「学画」と「質画」をめぐって

佐々木 丞平（京都大学文学研究科教授）

狩野派は我が国において15世紀末に狩野正信が雪舟伝来の中国の画法を修得し、工房を持ったことに始まるもので、幕府に仕える御用絵師として実に500年の長きにわたって存在していた。

中国画法を正統的に理解し、再現した開祖正信から、それを展開させ拡大化させていったのが元信、それを更に武士の気風に合う、雄大な構成と和画法としての完成を見せたのが永徳である。その後、幽玄さを追求する描法に傾倒していった探幽によって、様々な狩野派の描法がルール化され、狩野家のお家流として定型化し、認識されるようになった。

ここで注目すべき事は、中国画を直接学んだ雪舟から、次にその雪舟画を通して中国画を学習した正信、更に正信の作品を手本として育った元信、それを継いで結果的に漢画とはニュアンスの異なる独自の画法を成立させた永徳と、代を追うに従って漢画描法そのものからは離れ、和様化が進み、漢画法というよりは狩野家の描法となっている点である。狩野家では「学画」と「質画」という考え方を持っており、学画とは、学んで伝えることのできるもの、質画とは、その絵師個人の才能によって描かれる絵、という考え方である。つまり、学画は代々伝えていき、もとの型、描法、技法を何代もの先の絵師に伝えることができるというものである。ここでの利点は、一代では完成不可能な、長い年月を掛けてこそ完成できた高度な描法や技法が、初めて絵を学ぶ絵師にも再現できるようになるということである。

また、個人の才能に関わらず、学画は誰であっても一定のレベルに到達することのできるよう教育法も確立されていた。既に理論化も完成されているもの、手本とするものがあり、学ぶ技術があり、修得すべきルールがあって、習い覚える、それが「学画」の学習形態である。

一方の「質画」は、個人の才能に頼るものであるもので、感性の鈍い人には描けるものではなく、いわば、天才の作画方法として、唯一無二、その本人にしか描けないという制作方法になる。これであれば、伝統や規範に捕らわれることなく、どのような時代のルールや価値観にも縛られることなく、突然高度なものを出現させることもできる。しかし一方、そのように個人の感性に関わるものであるだけに、ルール化のしようもなく、教育方法の理論化の方法もなく、他者がそれを継ぐことは不可能なものである。

アカデミカを考察するとき、この伝統流派狩野派の発展、展開、継承、分裂という様々な状況は、実に多くのことを私共に示唆してくれる。時代や社会の変化、あるいは分野の違いを越えて、アカデミックであることの大本にプラトンの設立したアカデメイアを意識することで、その知的営みの持つ知識や理論の蓄積の力と、新しい発想、展開の力との二つの異なる方向性のエネルギーに注目して論考していきたい。

「伝統の発明」と哲学的アカデミズムの成立 カントとクーザンの場合

福谷 茂（京都大学文学研究科助教授）

近世哲学史において、いわば在野で通したデカルト、スピノザ、あるいはロック、ヒュームの時代とは違って、カント以降は哲学のアカデミズム化という事態が顕著になる。アカデミズムとしての哲学の成立はなにによって可能となり、またそれによってなにがおこったのだろうか。この報告においては、「伝統の発明（invention of tradition）」（ホブズボウム）という概念を手がかりにして、18世紀末から19世紀はじめに生じた哲学の自己再定義とその制度化という事態に焦点を合わせることを試みたい。

カントは哲学そのものにおいてだけではなく、哲学史記述においてもまた転回点画した。カントの哲学史的知識のソースはピエール・ベイルとブルッカーだと見られており、カントもまた批判前期においてはブルッカーの哲学史を引き継いだ哲学史観を持っていた。具体的にはブルッカーは哲学という概念を幅広く取り、ギリシャ世界以前のまた以外の地域・民族・時代に亘って哲学の存在を認めている。ところが、1781年以降批判哲学の形成と同時に、カントは哲学を排他的にギリシャに誕生して批判哲学に直結しているものとして捉えるようになるのである。これは哲学そのものに「歴史」のディメンジョンが内面化されたことを意味するとともに、きわめて特殊な哲学史像が批判哲学の制覇とともに自明化することでもあった。こうして19世紀初頭ドイツで確立された、古代ギリシャに発して北部ヨーロッパで完成される哲学という描像が出来上がり、ドイツ観念論においては広く世界史の全体像にまで拡大されたのである。この強力な描像そのものが20世紀中葉にいたるまでその後の哲学史自体の展開の原動力の一つとさえされてきたといえよう。ここに「伝統の発明」の哲学版を見ることができないのではないか。

そして19世紀初頭は独仏の哲学的交流が、フランスがドイツの最新哲学に学ぶというかたちで実現した時点でもあった。その立役者であるヴィクトル・クーザン（1792 - 1867）はドイツで実際にドイツ観念論の大物たちに会ったうえで、彼らの哲学を咀嚼してフランスに導入した。しかしフランスにおいてはドイツでは起こりえなかった事態が生まれた。すなわち、教育界に大きな影響力を持ったクーザンを通して、哲学が国家的な制度のうちに取り入れられたのである。現在私たちがフランス哲学の特徴として受け取る強固なアカデミズムの存在（そのうちにはドイツのカントが核心部分として組み込まれている）はこのような事情において形成されたのである。フランス哲学の伝統もまた「発明」されたものという面を明らかに持っている。

本発表では、カントとクーザンという実例を通して、哲学におけるアカデミズムが「伝統の発明」を媒介として生まれる現場をとらえ、それがどのように定着し、成果を生み出してゆくのか、という点を一瞥したい。

芝蘭会館へのアクセス

所在地: 〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮 11-1 電話 075-771-0958

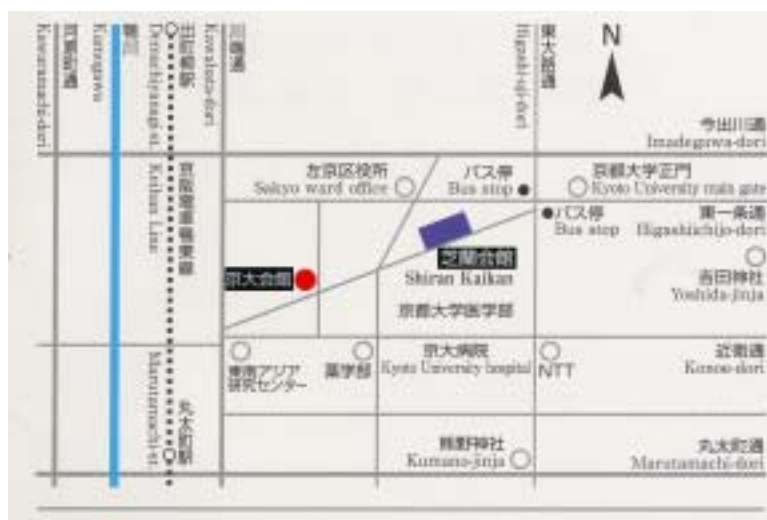
京都市バス: 京都駅より市バス D2 のりば(206)

阪急河原町・四条京阪より(南座向い)(201)(31)

いずれも京大正門前下車徒歩数分

京都バス: 三条京阪中央口より 13・14 番のりば 出町柳経由系統荒神橋下車

京阪電車: 鴨東線丸太町駅下車徒歩約 10 分



Canone

〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学大学院文学研究科

美学美術史学研究室 担当 皿井 舞

075-753-2752

email: canone-hmn@bun.kyoto-u.ac.jp

<http://www.hmn.bun.kyoto-u.ac.jp/canone/>